

第七節 教育

一 学校教育

(一) 大島郡教育会

大島郡教育会のことについて、「沖繩大百科事典」で当田真延氏は、次のように述べている。

大島郡教育会は一八八七（明治二十）年に発足した私立鹿児島県教育会の構成団体の一つである。会は全郡を第一部と第六部教育会に分け、教師の研修・児童・生徒の学力向上を目的として、さまざまな活動をおこなった。大正期には郷土教育が盛んになり、伊波晋猷・比嘉春潮などを呼んで講演会を開いたりしている。伊波の南島史考（一九三二年七月）は一九一八年（大正七年）古仁屋小学校でおこなった講演の筆録をまとめたもので同会の

発行。また、産業教育の一環として奄美大島振興歌を制定している。

第一部教育会 名瀬・三方・大和・住用
 第二部教育会 東方・西方・鎮西・実久・宇檢
 第三部教育会 北部大島（笠利・竜郷）
 第四部教育会 喜界島（喜界・早町）
 第五部教育会 徳之島（亀津・東天城・天城・伊仙）
 第六部教育会 沖永良部（和泊・知名）・与論
 相当な距離を隔てて五つの島にわかれ、しかもその島（大島・徳之島）の大部分が険しい山地におおわれた本郡地形の特色からして、陸上交通・海上交通共に不便を極めたこの時代に、ブロック単位に六つの教育研究会をつくり、各ブロック単位の教育振興を目指したのは、正に環境即応の良施策と言えよう。

(二) 第六部教育会

第六部教育会は、大島郡内の他の五教育会とともに明治二十年に発足した。長年の年月の間にはいくらかの消長はあったが、徹頭徹尾教育精神の高揚と児童の学力向

上を目指して鋭意努力した。明治から大正・昭和へと年を追うて充実発展し、郡内六教育会の中でも最も大きな実績を挙げ、所期の目的を達成した教育会である。沖永良部は「教育の島」「優秀教員輩出の島」と言われ名声を博したが、そのことは、元鹿児島市教育長甲斐不二男氏調査による左表が如実にこれを示している。

	本科	二部	講習科	計
大島	五五（八）	一三（四）	二七（四三）	一〇五（五五）
徳之島	四八（〇）	三四（二）	四八（二二）	一三〇（二二）
喜界	四二（〇）	一〇（二）	三〇（七）	八二（九）
沖永良部	六六（二九）	一八（六）	四五（三三）	二九（五〇）
与論	一〇（〇）	一（一）	八（三三）	一九（四）

（大正末まで）（内は女子）

沖永良部・与論の教育が今日を築き上げたのは、第六部教育会の力がその原動力となっていると言っても過言ではない。第六部教育会の会長は和泊・知名・与論尋常高等小学校長が輪番でつとめていた。

1 同学年研究会

① 毎年四月初めに、沖永良部島内の九校長が集まって校長会を開き、尋常科一年から高等科二年までの八個学年と専科（農業・裁縫）の研究当番校をきめ

る。当番校のきめ方は抽せんではなく、学級数の少ない学校から順にそれぞれの希望学年をとっていく方法であった。

- ② 各研究当番学年では各学級ごとに、学童の学力向上や訓育に懸命の努力をした。
- ③ 各学校では研究当番学年・学級を中心に、たびたび校内授業研究会をもって、研究学年と研究教科、特に学力向上についての研究を深めた。

- ④ 同学年研究会は毎年六月の下旬か七月の月上旬に、全島いっせいに、それぞれの学年の研究当番校で開催された。各教師は各自研究資料を持参して研究当番校にあつまり、終日熱心に研究討議した。当日の指導は各研究当番校の校長がおこなった。

2 秋季研究会

- ① 五つの研究ブロックをつくり、毎年十一月末に一ブロックずつ輪番で研究会を開催した。

和泊・国頭組
大成・内城組
知名・下平川組
田皆・島尻・上城組

与論組

② 研究日程

○第一日―ブロック内の一校で研究授業や研究発表等を実施し、研究討議した。

夜―青年団・婦人会等諸民主団体の研究公開。

○第二日―ブロック内の別の学校で研究授業や研究発表を実施し研究討議した。

夜―青年団・婦人会等諸民主団体の研究公開。

○第三日―民育研究会

午前―ブロック内の農耕地・各家庭のかまごそ
の他施設状況の視察。

午後―民育研究会

3 教育講習会の開催

毎年夏休み・冬休みなどの機会を利用し、長期間にわたって郷土教育や各教科等の講習会を開催し、全教職員が参加して研修を深めた。町内各学校の旧職員履歴書等には次のような記録が多い。

○大正五年八月二日から八日間、第六部教育研究会開設の夏期講習会に於いて博物科講習。

○大正七年第六部教育会開設の夏期講習会に於いて偉人

研究及び批判講習。

4 優秀な教職員が多く輩出した

第六部教育研究会の非凡な活動によって、教育振興の気風が全島内に充満して来た。男女青少年の中に教職員を志望する者が多くなり、刻苦勉励、男女師範学校を卒業して教職員になる者、または独学で諸検定試験の難関を突破して教職員として採用される者が多数輩出し、沖永良部島は郡内における優秀教職員の宝庫だと言われた。

(三) 和泊尋常高等小学校の沿革

「和泊尋常高等小学校沿革誌」には次のように記載されている。

1 大正二年度の主要行事・学級編制等

- ① 入学式―四月一日、入学式。式後校庭に於て小運動会開催。運動種類は新入児童の徒歩競走・在来児童の全部体操。

- ② 麻疹流行―四月初旬より点々流行の徴を認めしが四月二十五日に至り欠席児童二百五十、全二十九日

五百九名を算するに至りしが、五月下旬に至り終息を見るに至りたり。

- ③ 小笠原丸入港―徳之島・本島間海底電線切断久しく電音途絶せしが、五月二日接統工事のため来航。観覧の便を得、職員児童同船を視察せり。

- ④ 両村連合教育会―五月十日大城校において開会。政栄・橋口・沖・川平・長沢各氏の講習出張の報告ありたり。

- ⑤ 壮丁教育―五月十九日より開始。直接教育に従事されたるは島・俊・伊地知各訓導及び武山准訓導の四氏なり。

- ⑥ 島司来校―六月十日森谷島司来校。午前中授業を視察せられ、午後爾品評会へ臨席、講話。

- ⑦ 夏期講習会―七月二十二日より全二十九日に至る八日間、県師範学校教諭加勢氏を招へいし、知名校において国語科講習会を開き、授業は八月中に補充することとせり。

- ⑧ 同窓会―八月十日男子同窓会組織会開催。全十五日女子同窓会を開催せり。

- ⑨ 運動会参加―十一月八日知名校運動会に付、尋常

五年以上の男子を参加せしめたり。

- ⑩ 義士伝講話会―一月九日午後三時より尋常科一年二年三年を一組に、全四年五年六年を一組に、高等科を一組に、三集団にわかれて講話会を開催し、後夜行軍をなしたり。

- ⑪ 桜島噴火―一月十二日桜島噴火。十二日午後より全十七日に至るまで鹿児島市間は電信不通。十三日島庁よりの公報「昨朝桜島噴火し二村全滅。市は石と灰で埋まり海瀟も至り、壮丁の外皆避難の趣」との情報あり。人心恟々たりしが十七日後避難者帰来の消息もあり、汽船の入港に依り、本村出身者の異常なきを認め、やや安どせり。

- ⑫ 学芸会―二月十一日儀式執行後学芸会開催。回数四十九回。多数の参観者もありたり。

- ⑬ 陸軍記念式―三月十日南洲神社境内において記念式及び招魂祭を執行せられ、児童引率参会せり。

- ⑭ 大正二年学級組織及び教科
○学級編制

尋常科 十二学級 毎学年二学級
高等科 五学級 高一―二学級

- ありたり。
- ② 開校記念日―六月一日、開校記念式挙行。
- ③ 同窓会―八月十一日男子同窓会開催。琵琶の弹奏会員、来賓談話ありたり。十三日、女子同窓会開催。
- ④ 夏期講習会―八月二十六日より全二十日に至る。教諭松下友一氏を招き両村連合講習会を開催せり。
- ⑤ 戦時講話―九月二日、全児童を三組に分ち戦時講話会を開催せり。
- ⑥ 講談 九月五日吉田勝丸氏を招き武勇伝の講談をなさしめたり。全六日父兄の為に更に開催せり。
- ⑦ 遠足―九月二十三日、高二・三男島尻校における在郷軍人会開催の教練視察のため遠足。
- ⑧ 祝勝会―十一月二十六日、青島陥落祝勝会開催。余興として各校旗体操・舟こぎ競走・本校の模擬戦等ありたり。
- ⑨ 補習講習―衛藤校長補習講習を命ぜられ一月十九日出発。三月二十三日帰校。
- ⑩ 活動幻灯会―三月五日及び十五日の両日、県教育会徳永書記来島。活動幻灯会を開く。

高二―一学級

高三―二学級(男女別)

○児童数

・学年初めの児童数	九百十五名
・中途入学児童数	二十名
合計	九百三十五名
・学年末の児童数	八百八十名
差引減	五十五名
その内訳	
遊学	二十一名
死亡	八名
転学・退学	二十六名

- ⑮ 大正二学年度の沿革概要

本学年中における本校教授方針は、優劣により組を分け、劣組には特に復習時間を設け、専ら主要学科の教授を主とし、児童の力を基礎として其の上に築き立てることにせり。学年末における成績を案ずるに、多少劣等児童の学力向上を認むるに至りたるも、なお六十八名の認定及第あるは余儀なき次第なり。

2 大正三年度の主要行事

- ① 海軍記念講話―五月二十七日、川辺兵曹長の講話

3 大正四年度の主要行事

- ① 両村連合教育会―四月十七日下平川校で開催。衛頭校長補習講習の結果報告ありたり。
- ② 特別学級設定―劣等児救済のため、一部、イ・ロ・ハ・ニの四組を設け、各学年より低下の児童を集め学力の特別補充をなす事とせり。素より固定的のものにあらずして、補充出来次第相当学年に上移若くは復帰せしむることとせり。低下学年に籍を一時移すも六箇年在学する者は、学力は同程度に達せざるも義務は免除するの精神を有する組織となせるなり。
- ③ 校旗設定―七月五日汽船蔚山丸運転士撰正純氏より校旗一旒寄贈。之を以て本校校旗と定めたり。
- ④ 夏期講習会―八月二十五日より授業を繰り替え、師範学校の松下教諭を招いて、知名校で両村連合講習会を開催せり。
- ⑤ 教育組合―出席不良の字に出席組合を組織した。
- ⑥ 御真影拜戴―十一月二日伊延港に御真影を奉迎し翌二日拜戴式を挙行せり。
- ⑦ 御即位式―十一月十日午後二時御即位式挙行。一

般参列者多く、みどりの盛式なりき。

⑧ 連合大運動会―十一月十四日神社参拜後、長浜において村内各校連合運動会を開催せり。

⑨ 村教育会―二月十三日本校で開催。第一時全校授業、第二時体操、第三時読方の研究授業、午後批評会及び郡教育会。校長会報告ありたり。

4 教職員名簿

和泊尋常高等小学校

〔明治四十四年六月より大正十五年三月までに任命の分〕

(出身地)	(職名)	(氏名)	(就任年月)	(離任年月)					
和泊村和泊	訓導	橋口盛隆	四四・六	六・七	全	和泊	訓導	永野宮竹	二・二一
全	和泊	操 松	四四・六	元・二二	全	永嶺	農專訓	永野宮竹	二・二一
全	和泊	島 義智	四四・六	一三・三	全	手々知名	准訓導	谷元重義	三・三
全	和泊	山口通憲	四四・六	一三・三	全	和泊	訓導	武山宮定	三・三
全	和泊	名島直利	四四・六	四五・三	全	和泊	訓導	沖 フシ	三・三
全	和泊	伊地知季彦	四四・六	三・五	全	和泊	訓導	俊 ムメ	三・三
知名村上城	訓導	英 宗呈	四四・六	二・二〇	全	手々知名	訓導	沖 カネ	三・三
和泊村手々知名	訓導	町田ツル	四四・六	二・二〇	全	和泊	訓導	木藤エイ	三・三
全	和泊	武山宮信	四四・六	二・二二	全	和泊	代用教員	和 マツ	三・三
全	手々知名	園田仲生	四四・六	一四・三	全	西原	訓導	西村実孝	三・三
					全	哇布	准訓導	永吉池治	三・三

和泊村和泊	訓導	伊地知力ネ	四・三	昭和	与論村足戸	訓導	白尾義之助	一三・三	
全	和泊	日置八ナ	四・六	大正	三方村小湊	代用教員	川上忠吉	一三・四	
全	和泊	竹 ツル	五・三	八・三	和泊村和泊	訓導	川畑一誠	一三・四	
全	手々知名	上別府謙吉	五・一	九・三	全	和泊	代用教員	有川貞辰	一三・四
全	和泊	鎌田静林志	六・三	一〇・四	天城村瀨滝	訓導	盛 長良	一三・四	
全	西原	東 貞良	六・三	一〇・四	喜界村坂嶺	訓導	盛 正	一三・四	
大分県大分郡	校長	藤木龜雄	六・五	一一・三	和泊村手々知名	訓導	基 英城	一三・四	
和泊村和	訓導	東 伸一	七・三	一一・三	和泊村手々知名	訓導	上別府謙吉	一三・四	
全	手々知名	沖 利文	七・二	一四・三	全	手々知名	武田惠喜光	一三・四	
全	手々知名	玉江末駒	八・三		伊仙村伊仙	代用教員	永喜佐官	一四・一	
全	和泊	武山ハル	八・三		和泊村喜美留	訓導	伊地知実英	一四・三	
全	和泊	甲 東寿	八・五	一三・四	全	田舎平	撰 正雄	一四・三	
全	和泊	武宮清盛	九・三	一〇・四	和泊村古里	訓導	島名太一	一四・三	
全	手々知名	福山ナツ	九・三		和泊村古里	訓導	重村邦英	一四・三	
全	手々知名	逆瀬川助直	九・五	一四・三	全	和泊	柴 タケ	一四・三	
全	手々知名	福山マツ	一〇・三	一二・二〇	全	永嶺	永野宮竹	一四・三	
全	内城	豊山義綱	一〇・三	一四・二二	全	和泊	山口エイ	一四・三	
天城村岡前	校長	石 吉忠	一一・三	一三・三	全	出花	泉 中安	一四・三	
和泊村和泊	訓導	武宮清盛	一二・三	一三・三	全	国頭	南 米憲	一四・四	
全	和泊	永野益道		一三・三	全	国頭	福島忠綱	一五・三	
天城村岡前	訓導	中島幸梅	一二・九	大正	全	瀬名	中村静造	一五・三	
和泊村手々知名	訓導	田浦中澄	一二・九	昭和	全	手々知名	福山ナツ	一五・三	
全	手々知名	玉江末駒	一三・三	一一・三	全	和泊	秋葉ミヨ	一五・三	
全	和泊	源(武山)心	一三・三	八・三	全	玉城	花田吉浦	一五・三	
与論村	訓導	福永卯之助	一三・三	大正	全	根折	池田池憲	一五・三	

和泊村々々知名 代用教員 園田為久 大正一五・五 大正一五・八
 全 和泊 代用教員 種子田道起 一五・二 昭和 二・八

(四) 国頭尋常高等小学校の沿革

「国頭尋常高等小学校沿革誌」には次のように記載されている。

1 大正十年六月一日修業年限二ヶ年の高等科を併置し国頭尋常高等小学校と改称す。教室不足のため二部授業をなす。

2 大正十一年年度学級編制表

科	尋常科	科	学年		卒業修業児童数	学級
			男	女		
第一学年	計 六	計 二	一六三	一七五	三三八	一六
			二二	三〇	五五	
第二学年	計 五	計 二	二二	二九	五一	一
			二九	二七	五六	
第三学年	計 四	計 二	二八	二五	五三	一
			二八	二五	五三	
第四学年	計 三	計 二	三六	三六	七二	一
			三六	三六	七二	
第五学年	計 二	計 二	二二	二八	五一	一
			二二	二八	五一	
計	計 二七	計 二七	一六三	一七五	三三八	一
			二二	三〇	五五	

3 教職員名簿

(出身地)	(職名)	(氏名)	(就任年月)	(離任年月)
和泊村古里	校長(三代)	重村窪利	大正二・四	大正四・三
和泊	訓導	武山ハル	二・四	八・四
古里	訓導	里村スミ	二・四	四・七
国頭	訓導	名島直利	三・四	一〇・四
国頭	代用教員	佐々木寅之助	三・二	一〇・一〇
西原	校長(四代)	柏常秋	四・四	二・三
西原	訓導	西村実孝	四・六	一〇・三
和泊	代用教員	伊集院カネ	五・五	九・三
国頭	訓導	佐々木ウメ	八・四	昭四・三
畦布	代用教員	宮田吉秀	九・四	大正二・二
出花	訓導	泉中安	一〇・四	二四・三
西原	訓導	東貞良	一〇・五	二〇・七
国頭	代用教員	脇田清澄	一〇・一〇	昭三・三
和泊	代用教員	源勝	一〇・一〇	大正二・七
和泊	訓導	前久徳	一〇・二	二・八
和泊	校長(五代)	武山宮定	一・八	一三・三
西原	訓導	西村実孝	二・三	二四・三
国頭	訓導	佐々木ナツ	二・四	昭三・三

和泊村和泊 校長(六代) 島義智 大正一三・四 昭和六・三
 全 国頭 代用教員 西村米悦 一三・四 四・三
 全 和泊 訓導 甲東寿 一四・四 八・三
 名瀬市 訓導 松井亀助 一四・四 二・三
 与論村茶花 訓導 白尾義之助 一四・四 二・三
 和泊村和泊 訓導 武山初枝 一四・四 二・三
 全 西原 訓導 村山上信 一五・四 二・三
 全 和泊 代用教員 種子田道起 一五・五 元・二

(五) 大城尋常高等小学校の沿革

「大城尋常高等小学校沿革誌」には次のように記載されている。

1 大正十一年年度学級編制表

学年	児童数	受持教員	
		職名	氏名
尋一男	六〇	訓導	柳 窪実
尋一女	五九	訓導	川平 スミ
尋一	八〇	訓導	重村 中信
尋三	六三	准訓導	重村 窪秀
尋四男	四四	訓導	重村 窪秀
尋四女	五七	訓導	西村 実孝
尋五男	四八	訓導	平 富秀

2 大正十一年年度末 卒業・修業・落第児童数等

学年	卒業生	修業生	落第生	学業賞	精勤賞
尋一	五五	五二	四	八	二
尋二	三六	三三	三	六	九
尋三	四三	二五	〇	〇	〇
尋四	四三	三九	三	三	七
尋五	四〇	五〇	三	六	九
計	三三八	三三八	四	二〇	二六

3 大正十一年年度学級編制及び受持教員

学年	児童数	受持教員	
		職名	氏名
尋一男	五九	訓導	柳 窪実
尋一女	四八	訓導	柳 窪実

学年	卒業生	修業生	落第生	学業賞	精勤賞
高	三	三	〇	三	三
計	三八	三八	四	二〇	二六
六	四二	四〇	三	六	九
五	四三	三九	三	三	七
四	四三	三九	三	三	七
三	三六	二五	〇	〇	〇
二	三六	三三	三	六	九
尋一	五五	五二	四	八	二
計	三三八	三三八	四	二〇	二六

計	高二	高一	尋六	尋五女	尋五男	尋四	尋三	二女	尋一男
六三四	四八	五八	八〇	五五	四二	六七	七〇	五八	五八
	訓導	訓導	訓導	訓導	准訓導	准訓導	訓導		訓導
	重村中久	橋口富一	田宮十内	福山ナツ	俊道三	重村中信	川平スミ	(一部授業)	平富秀

4 教職員名簿

(出身地)	(職名)	(氏名)	(就任年月)	(離任年月)
和泊村手々知名	校長	逆瀬川助熊	大正二・四	大正三・二
全	手々知名	逆瀬川助直	三・二	九・五
全	手々知名	大脇ムメ	三・三	六・三
全	古里	川平スミ	四・六	一三・三
知名村上城		沖野マゴ	五・三	七・三
和泊村古里		重村中信	五・五	一四・四
全	和泊	武山宮定	六・三	一一・八
全	和泊	橋口盛隆	六・七	一二・三
全	大城	伊集院マツ	六・三	八・九

全	皆川	中原カ子	七・三	七・二
全	手々知名	福山マツ	八・三	一〇・二
全	古里	重村中久	八・三	一〇・三
全	大城	橋口富一	八・一〇	一〇・五
全	古里	重村蓬秀	九・三	一一・九
全	手々知名	福山ナツ	一〇・三	一二・九
全	西原	西村実孝	一〇・三	一一・九
全	和泊	俊道三	一一・二	一二・四
全	手々知名	玉江末駒	一二・三	一三・四
全	古里	古村マゴ	一二・三	一五・九
全	和泊	大内山ヨネ	一三・三	一四・三
全	国頭	南米憲	一三・四	一四・四
全	和泊	武山宮定	一三・三	一三・八
全	古里	里村本道	一三・三	一三・八
知名町田皆		田宮十内	一一・九	一二・五
和泊町根折		曾木新吉	一二・一〇	一三・一
全	大城	橋口富一	一三・四	一三・一
全	西原	柏常秋	一三・八	一五・三
全	皆川	皆川恵一	一三・一	一三・三
東天城村花徳		藤崎好景	一四・一	一四・六
伊仙村伊仙		永喜佐宮	一四・三	一五・三
和泊村手々知名		沖フミ	一四・三	一七・三
全	古里	重村蓬秀	一四・三	一七・三
知名村余多		平瀬ハル	一四・四	一五・二
知名村上城		神崎西直	一四・五	一八・八

2 大正十一年度学級担任等

和泊村後蘭 朝戸大屋治 大正一四・三 昭和五・一
 知名町屋者 林清良 一五・三 四・四
 知名村屋子母 校長 藤村前吉 一五・三 三・五
 亀津村亀津 篠原道利 一五・五 三・三
 和泊村古里 田中静 一五・六 五・三
 知名村余多 吉川ヨネ 一五・一〇 五・三

(六) 内城尋常高等小学校の沿革

「内城尋常高等小学校沿革誌」には次のように記載されている。

1 大正十年度学級担任等

尋常科一年	訓導	市来種生
〃 二年	代用教員	赤池ヨネ
〃 三年	訓導	大内山ヨネ
〃 四年	訓導	永野貞久
〃 五年	准訓導	橋口富一
〃 六年	訓導	大田前二
高等科一年	訓導	武宮清盛
校長		川平植美

3 大正十二年度学級担任等

尋常科一年	准訓導	永吉池治
〃 二年	訓導	市来種生
〃 三年	訓導	大内山ヨネ
〃 四年	訓導	撰正雄
〃 五年	訓導	橋口富一
〃 六年	訓導	橋口豊重
高等科一年	訓導兼校長	川平植美
〃 二年	訓導	豊山英敏
校長		川平植美

校長

2 大正十一年度学級担任等

尋常科一年	訓導	市来種生
〃 二年	訓導	大内山ヨネ
〃 三年	訓導	橋口豊重
〃 四年	訓導	橋口富一
〃 五年	准訓導	大田前二
〃 六年	訓導	川平植美
高等科一年	訓導兼校長	武宮清盛
〃 二年	訓導	川平植美
校長		川平植美

4 教職員名簿

(出身地)	(職名)	(氏名)	(就任年月)	(離任年月)
和泊村内城	宗 安明	大正 二・三	大正 二・一	
全 内城	宗 マス	二・三	五・三	
全 和泊	山口通知	二・一	六・三	
全 和	前 マツ	三・三	六・三	
知名村大津勘	大納ハル	五・三	五・九	
和泊村和泊	平良勇次郎	五・一〇	七・一	
知名村久志候	沖久スエ	五・一〇	七・三	
和泊村手々知名	大脇ムメ	六・三	九・五	
全 内城	宗 安明	六・三	七・六	
	新村国元	七・三	七・五	
和泊村手々知名	永野貞久	七・九	一一・九	
全 //	大内山ヨネ	七・一	一一・三	
全 和泊	市来種生	八・三	一一・三	
全 国頭	脇田清澄	八・一	一一・三	
全 後蘭	赤地ヨネ	九・五	一一・六	
全 和泊	武宮清盛	一〇・四	一一・三	
全 大城	橋口富一	一〇・五	一一・三	
全 内城	橋口豊重	一一・九	八・六	
全 内城	豊山英敏	一一・三	一〇・三	
全 根折	曾木新吉	一一・三	一一・九	
全 手々知名	福山マツ	一一・九	一一・一	
全 畦布	永吉池治	一二・九	一四・三	

全 田舎平	撰 正雄	二・一	一四・三
全 皆川	川平スミ	一三・三	昭和 二・三
全 和泊	山口エイ	一三・三	大正 一四・三
全 永嶺	柴タケ	一三・三	一四・三
知名村上城	水野宮竹	一三・三	一四・三
伊仙村伊仙	沖野松盛	一四・三	昭和 一五・六
知名村余多	守 益雄	一四・三	一一・三
和泊村和泊	元山マゴ	一四・三	七・三
知名村屋子母	有川 妙	一四・三	五・八
伊仙村	宮里 健	一五・六	二・三
	良 宗一	一五・六	四・三

○内城小学校の思い出

竹 玉寛

私は、大正六年内城小学校に入學しましたが、五年生のとき、高等科が併設されて内城尋常高等小学校となり高等科二年を大正十四年三月に卒業しました。その時のなつかしい同級生が瀬名の市来武義、ツル夫妻、それに中村嘉昌さんが今なお健在です。内城では沖ハツさん、和泊に保ツルさん、徳田ナオさん、徳田ツルさんで三名、後蘭に前田豊盛さん、前田ミツさん、永嶺の永野ナツさんが今も健在です。本土にはたくさんの同級生が散在し、武玉安さん、中村源助さん、豊原秋さんとは今も賀状を

交換しておりますが、例外なく年をとり、もう七十三歳の老人になってしまいました。

一年生ときの恩師は大田前二先生でした。二年生になると平良勇二郎先生、後で大内山ヨネ先生、三年は市来種生先生、四年のとき永野貞久先生、五年生は橋口富一先生、六年生は大田前二先生、高一は福山マツ先生が一学期間、後は川平植美校長が担任代理になりました。そのころでした。教室不足で今のグラウンドのあたりにかやぶきで、かや壁の掘って立て小屋が作られて、机腰掛けを持ち込んで高一の教室にしました。高二は豊山英敏先生でした。これらの先生方皆物故され、今なつかしい御姿に接することができないのは残念でなりません。そのご冥福をお祈りするだけです。

私は小学校在学八年間、現在の仁志の我が家から学校まで八キロの道を通学したのですが、子供心にも通学の辛さが忘れられません。今の舗装道路とちがって道幅が狭く、雨のときは、困りました。雨が降ると永嶺の溜池からシニヤタまでは魔の道路に変わりました。ぬかるみになり、足が取られて前に出ない、シニヤタの溝のところは白土で油断しようものなら、すぐ滑る。それを通っ

てすぐ東は石原道。雨にたたかかれて石が白く露出し、足が痛くて歩けないのです。

夏になれば、永嶺の池の一本道は、歩いていても歩ききれないまっすぐな一本道で、子供の足にはあまりにも長いものでした。冬になれば帰り道、西に向かつて歩くのですが、北風がもるに吹きつける場所が二カ所ありました。徒歩だった昔は万人が悩まされた個所だったのでしよう。

一年のときは、鉛筆やノートはなく、石板と石筆で勉強しました。先生が石板に白墨で丸を下さると消えないように石板だけは手に持って凱歌をあげながら帰った子もいました。学用品はふるしきに包んで通学しました。時にはそのふるしきで砂も運びました。学校では砂場に砂を入れる必要から年に一回か二回、内喜名の海から、全校生徒に砂を運ばせました。子供はそれぞれふるしきを持って出掛け、包んだ砂を肩や頭にのせて学校まで運ぶのですが、破れたふるしきの穴から砂が少しづつ漏れて、学校に着いたときは、ふるしきの砂は半分になっておりました。

苦しい思い出ばかりではありません。おもしろくてた

まらない遊びがありました。夏になると庭のせんだんの木がこんもりと茂り、その下に坐りこんで、休み時間中盛んに「国取り」に熱中しました。また男の子は蹴り合いの遊びをしました。これは勇壮活発で運動量がありおもしろくてたまらない男児向きの遊びでありましたが、危険だという理由で禁止になり、少年の楽しい遊びを取り上げられた寂しさつらさを味わったことは今でもよく覚えています。

それから机を年に一度お正月に学校の前の池で洗うことが年中行事になっておりました。学級ごとに机を運び出し、手に手に縄切れや棒切れでもって机のよこれを取れば作業は終わります。

五年生のときのことです。いよいよその時間になると級友たちは机をもつて一斉にとび出しました。私はどうしたのか、今だにその理由は分かりませんが、級友に後れてしまいました。見ると教室の机は一つも残っていません。残っているのは教室の片隅に皆で物をのせる古机一つ、しかも何年も磨いたことがないからよこれや墨や手あかがこびりついた代物が残っていました。私は仕方なくその古机をもつて池に行きました。一時間ほど躍起

になって洗いましたが、少しも汚れが落ちません。池に残っていたのは私一人です。ちよつときびしくなりました。級友たちはと見ると、校庭でききとして足蹴り遊びをしているではありませんか。私は未完成の古机を教室に持ち帰りました。そして先生に連絡をとりました。十八歳の橋口富一先生です。今の高校生ぐらいの年で、頭はざんぎり、霜降りの詰め襟を着ておられました。その先生は職員室から教室に帰って来られて私の前に立たれました。私は、「先生、この机はもうできません。」と例の少しだけ磨いた机を指しました。先生はあまりにも偉かったのです。高校生ぐらいの向こう気さかな青年教師です。「おまえ、級長のくせにこれは何だ。」と大喝一声、私を張りどばしそうです。しかし橋口先生はそうはしませんでした。私の申し出に黙って下を向かれました。寂しそうな顔をしました。その寂しそうな顔が心にやきついて一生私は忘れられません。いやそれどころか、私の一生を無言のうちに導いて下さったのであります。やがて先生は黒板の方へ歩かれてやおら白墨をとり、「なせばなる、なさねばならぬ何事も、ならぬは人のなさぬなりけり」

と修身の教科書にあった上杉鷹山の道歌を書き終わると、私には一言も言わずに教室を出て行かれました。万事終わりです。私はその古机を池に持って行って、一気に汚れを落としました。やっぱりやればできると思い、意気揚々と磨き上げた机を持って教室に帰りました。成せば成る、これは私の座右の銘となり、後に私のロマンチズムに油を注ぎ火をつけ、それから学問にも、教育にもやれるだけのことはやり、ゲーテのファウストのようにな人生を駆け抜けてきました。その他にも学校に行くのがおもしろく、橋口先生から教わったことは全部覚え、先生がそこにいるだけで私たちは幸福感いっぱいでした。その先生とは一カ年でお別れしましたが先生との付き合いは先生が御他界なさるまで続きました。

以上のようにして悲喜こもごも、夢多かりし少年時代は過ぎましたが、ここに私の人間形成と不可離な関係にあったものがありました。それは八年間学校の行き帰りに、いやおうなしに見聞しなければならなかった田園風景とその奏でる詩であります。道を通りながらワタンチブルとグラルブルが一望の下に見えました。今は耕地整理された畑になっていますが、当時は年中水をたた

えた湿田だったのです。米の出来は悪かったらしいが、春には方々で田植えがあり、秋には取り入れが行われました。水田には、かに、ふな、うなぎなどがうようよしていました。五月雨のときは、白鷺が何十羽も悠々と空に舞い、やがて青い水田に点々と白い花を咲かせました。冬には水が光り、ばんやヨーバートが餌をあさり私たちは立ち止まってその静寂な風景に触れ、来る年も来る年も八年間この風景を眺めました。大山の広大なすそ野が横たわり、その向こうに何があるか少年の望みをかなえそうな何かがあると期待しながら八年間を過したのであります。

(七) 実業補習学校

実業補習学校について、「鹿児島県教育史」（鹿児島県教育委員会編）は次のように述べている。

義務教育を終えて上級の学校に進む者は別として、義務教育を終って直ちに社会で働く青年の教育はどうするか、このことは大きな問題である。政府は一八七二（明治五）年の学制において、「諸民学校ハ男子十八歳女子十五歳以上ノモノニ生業ノ間学業ヲ授ケ、又十二歳ヨリ

十七歳マテノ者ノ生業ヲ導カンカ為メ専ラ其業ヲ授ク。故ニ多ク夜分ノ稽古アラシムヘシ」といい、早くから配慮していたが、当時は小学校の整備に忙しく、勤労青年の教育はすぐには着手できなかった。一八九三(明治二十六年)年十一月実業補習規定が出るに及んで、はじめてこの教育が始まった。

(八) 和泊村立和泊実業補習学校校則

(大正五年九月)

第一章 総則

第一条 本校は実業補習学校の規程に依り、実業に必須なる知識と技能とを授けるとともに普通教育の補習をなすを以て目的とす。

第二条 本校は和泊尋常高等小学校に附設す。

但し時宜に依り各大字において教授することあるべし。

第三条 修業年限は二ヶ年とする。

但し、特に修得の程度を認めて、年限以内に卒業を認定することあるべし。

第四条 生徒の定員は男子六十名女子六十名とす。

但し時宜に依り定員を越え入学せしむることあるべし。

第二章 学科及び課程

第五条 本校の学科目は修身、国語、算術、農業(男子)、機織、裁縫家事(女子)とす。

第六条 各学科目の課程及び毎週教授時数は別表の如し。

第三章 学年及び教授の季節

第七条 学年は四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第八条 教授は農閑の季節を選びて行うものとす。

第九条 教授の終始の時刻は午後一時より午後五時までの間とす。

但し季節により夜間或は午前授業を行うことあるべし。

第四章 入学 退学

第十条 入学期は毎学年の始とし、募集すべき人員及び出願期日は学校長之を定め、其都度予め広告す。但し時宜に依り臨時入学を許すことあるべし。

第十一条 本校に入学せんとするものは左の資格を備えるを要する。

一、尋常小学校及高等小学校を卒業したる者若くは年令満十二歳以上にして之と同等以上の学力を有する者

二、身体強健、品行方正、志願確実なる者

第十二条 入学志願者は左記の様式に依り、入学願書を学校長に差出すべし。

入学願

本籍○○県○○郡○○市
町大字○○番地
戸籍○○男
女
現住所○○郡○○村大字○○番地

氏名

生年月日

私儀御校へ入学志願に付御許可被下度 在学中は御規則固く相守可申候 此段相願候也

年月日

右氏名

父兄氏名

和泊実業補習学校長何某殿

印

印

第十三条 疾病又は其他やむを得ざる事故に依り退学せん

とするものは、その理由を具し学校長に願出で許可を受くべし。

第十四条 左の各号の一に該当する者は退学を命ず。

一、品行不良にして改善の見込みなき者。

二、正当の理由なくして、引続き教授時期の一ヶ月以上欠席したるもの。

第五章 試験・進級及び卒業

第十五条 各学年の課程の修了又は卒業を認むるに、平素の成績を考査して、之を定むるものとす。

第十六条 各学年の課程を修了したる者、又は卒業したるものには左記の証書を授与す。

修業証書

氏名

生年月日

本校第○学年ノ課程ヲ修業セシコトヲ証ス

年月日

鹿兒島県大島郡和泊村立和泊実業補習学校

校長 氏名 印

第○○号

卒業証書	
氏名	生年月日
本校規定ノ学科ヲ了ヘタリ仍テ茲ニ之ヲ証ス	
年 月 日	
鹿児島県大島郡和泊村立和泊実業補習学校	
校長 氏名 印	第〇〇号

第十七条 授業料は当分之を徴収せず。

附 則

第十八条 本則は大正五年九月一日より之を施行す。

大島郡和泊村立和泊実業補習学校

教科目課程並ニ毎週教授時数配当表

学年	毎週教授時数	第一学年		学年	毎週教授時数	第二学年	
		修身	国語			修身	国語
男三	女一	道徳の要旨	日常須知の文字及普通文の読方、書方、綴方	男二	女三	全上	全上
男三	女一	整数、諸等数、分数、珠算(加減乗除)	比例歩合計算	男三	女一	全上	全上

計	家事	裁縫	機織	農業
男十二 女十二	女一	女三	女四	男五
	家事の大意	裁ち方・繕い方 通常衣類の縫い方	組織・意匠・機織・染色方法	土壌・肥料・作物 耕耘・病害虫 養蚕・家畜・農産 製造等の大意
男十二 女十二	女一	女三	女四	男五
	全上	全上	全上	全上

(備考) 季節の都合により授業時間の増減をなすことを得

二 社会教育

(一) 民育研究会

大正時代から昭和中期にかけて、沖永良部島社会教育進展の原動力となったものは、実に第六部教育会の民育研究会であった。

1 第六部教育会主催の秋季研究会は、毎年十一月末、

和泊・知名・与論の三村輪番で、各々当番村の当番学校

区で実施され、三カ村の教育職員が、ほとんど全員参加し、大島支庁学務課の県視学が、これを指導した。

2 第六部教育会では、「心身ともに健全で優秀な子供」を育成するためには、学校教育・家庭教育・社会教育の三者連携が必要であることを痛感し、一日目と二日目の昼間は、各々の学校で学校教育に関する研究会を行い、

① 夜間は各集落で、青年団・処女会・婦人会・少年団・字常会等を公開し、その研究会を実施した。

② 三日目の午前中は各家庭を訪問し、住宅内外の環境整備状況や、改良かまどの普及状況・改良便所の普及状況・改良畜舎の普及状況とたい肥の積み込み状況等を視察した。

③ また田畑を巡視し、その耕作状況や農道の開設普及状況を視察した。

④ 他村から参加した教職員は、当番学区の学童のいる家庭に分宿し、家庭における学習やしつけなどについて指導したこともたびたびであった。

⑤ あわせて農産品評会を実施したこともある。

3 三日目の午後は民育研究会にあって、左のことについて研究討議した。

て研究討議した。

① 家庭教育のあり方について。

② 少年団・青年団・処女会・婦人会・小組合常会等、民主団体の充実発展について。

③ 家庭の環境整備について。

○清潔整とん ○改良かまど

○改良便所 ○改良畜舎とたい肥

④ 農道の普及発達について。

4 これらの社会教育・家庭教育の充実発展は、一朝一夕にしてできるものではなく、長年にわたる継続的努力が必要である。三村の住民は、それぞれ高い目標と、それを達成するための具体的な長期計画をもって、一

つ一つ着実に実行していった。

5 それぞれの学区において、社会教育や家庭教育の第一線に立つて実地指導を行ったのは、各字担当の教育職員であった。各教職員は毎晩のように各担当字に出かけて行き、それぞれの民主団体を指導し、改良かまどの作り方やたい肥の積み方まで指導した。そのお陰で学校教育・家庭教育・社会教育の三者が有機的に

結びついて、三者連携の実を挙げ、各民主団体は充実発展し、各字に農繁期における無人売店ができるまでに社会が浄化された。

(二) 夜学校と日曜学校

大正時代における夜学校と日曜学校の活動状況について、昭和五十八年十一月、和泊町高齢者学級生（七十歳～八十三歳・各字とも二名以上出席）七十四名を対象に調査したら、町内の各字とも小組合単位または字単位の夜学校や日曜学校があったとのことである。

第六部教育会は、学童の人格形成と学力向上を目標として努力し、その目標は各学校単位に具体化され、実現されていった。すなわち、各学校とも、学校内における同年齢集団の切磋琢磨と平行して、各地域社会においては、新進舎の精神を受けついで、異年齢集団による共励切磋を促進した。

1 各学校とも学童の学力向上に努力した。
① 各学校では、毎学期末に、全校児童（尋常一年から高等二年または三年まで）の学業平均点数を、各小組合単位に集計し、その平均点を出し、各小組合

単位に順位をつけた。

② また全校児童（尋常一年から高等二年または三年まで）の欠席・遅刻・早退等の勤怠状況を、各小組合単位に集計して、百分率を出し、その順位をつけた。

③ 各学期末には、各小組合長を学校にあつめて学力向上について指導するとともに、各小組合別学業成績一覧表と、勤怠状況の一覧表と、その小組合員学童全員の個人別通知表を各小組合長に渡した。

④ 各小組合長は、それぞれ自分の小組合の学童全員と、父兄および小組合員全員をあつめて、各学童に通知表を渡すとともに、学業成績や勤怠状況について、全校内における状況・順位等を説明し、全学童と父兄の奮起を促した。

2 夜学校が出来た。

① 各小組合単位に、大正中期ごろから夜学校が始まり、漸次全村内へと波及し、昭和初期までには、村内の全小組合に夜学校ができた。

② 夜学校には、その小組合内の尋常一年から高等二～三年までの男女全児童があつまり、ゆり箱を持ち

寄って机代用で使用し、毎晩点灯時から二時間くらい、教科の予習や復習をした。

③ 会場としては、最初組合長宅か小組合内で割方家が広くて家族の少ない家の母家を借用したが、夜学校が盛んになるにつれて、小組合員全員が出資して、夜学舎を特設する小組合も多くなった。

④ 灯火としては二～三個の石油ランプを使用した。石油代として、学童全員月二銭くらいの会費を拠出した。また日曜日などに学童がそろって山林に行き、松の木の枯葉や松かさなどを拾い集め、それを売って石油代にあてることもあった。

⑤ 夏休みなどは夜間の学習会をやめて、毎日午前八時ごろから十時ごろまで、全学童が夜学校に集って勉強した。

⑥ 夜学校の会長・副会長・ランプ係等の役職には各小組合の上級生があたり、先輩は良く後輩をかわいがって指導激励し、後輩は先輩を敬慕して、たがいに励ましあいながら、全員そろって、よく勉強したものである。

⑦ 夜学校では、毎月一回くらいの割で、学童・父兄

全員があつまって学芸会をした。学芸会には全学童が朗読・お話・唱歌などの発表をした。

⑧ 夜学校の指導には小組合長・小組合内の有志・先輩・字指導担当教師らがあたった。

3 日曜学校が盛んになった。

① 日曜学校の始まりは、新進舎の流れをくむ手々知名字である。日曜日の早朝、手々知名字の全学童が、南洲神社にあつまって、境内や道路の清掃をしてから、全員そろって南洲神社や招魂社を拝み、その後で体操をしたり、歌を歌ったり、玉江柳曹氏その他字の先輩方が訓話等をして指導した。次に掲げる「日曜学校の歌」は、手々知名出身の園田中英氏（元和泊尋常高等小学校訓導）が作詞作曲したもので、今日に至るまで、手々知名青少年団の愛唱歌になっている。

日曜学校の歌

一、港湾みなぎる 太平洋

くれない染むる 朝日子が

光を我等に投げ出せば

若き血潮はおどるなり

二、維新の三傑西郷を

まつれる清き西郷社

この英雄の魂ぞ

我等理想の的なるぞ

三、風景美なる南洲橋

真白き砂子の長浜も

共に我等アカタジの

パラダイスとも言うべきぞ

四、清きこの郷アカタジに

産声あげたる日曜校

いざいで学ばん文庫へ

いざ清め行かん文庫へ

五、立てよ勇めよ学友よ

我等健児の心には

言うに言われぬものあるぞ

つとめはげめよ手をととりて

② 同様のことを、上手々知名は菅原神社の境内で、

和泊字は西郷南洲先生謫居之地で実施した。

③ 有名な沖元綱先生が、毎早朝、鈴を鳴らし、たい

肥材料の牛馬ふんをあつめながら、早起きを奨励し、

日曜学校に寄って、学童たちを指導されたのは有名な話である。

④ 日曜学校は手々知名・和泊から、町内の全字へと波及して行った。

⑤ 各日曜学校には、その字の全学童が参加し、ときには、神社の境内や道路などに砂を運び入れる奉仕作業なども実施していた。

⑥ 各日曜学校の会長・副会長・班長（各小組合）等の役職員としては、高等科二、三年の上級生があたり、各日曜学校とも、上級生は下級生をかわいがって指導し、下級生は上級生を敬慕し共励切磋の実をあげていた。

⑦ 各日曜学校の指導は、その集落の区長・小組合長・有志・先輩・字指導担当教師らがあたっていた。

(三) 青年団

1 大正時代における青年団について、「鹿児島県教育史」(鹿児島県教育委員会編)は次のように述べている。

一九〇五(明治三十八)年九月、内務省が、「地方青年団体向上發達に関する件」の通牒を出し、同年十二月

文部省から「地方青年団体奨励ニ関スル件」の通牒が出されると、鹿児島県もそれに従って一九一〇(明治四十三)年、青年指導に関する訓示を出し、次のようなことを指導の目標とした。

① 目的の自覚 家族の一人としての自覚 国家の一人としての自覚

② 教育勅語・戊申詔書の趣旨の徹底

③ 忠孝の大義

④ 敬神の風

⑤ 模範人物の設定

⑥ 実業思想並実用的知識と常識
小学校の先生たちは、この目標に従って、青年会を巡回講演した。そのために青年団の夜学は、このころから盛んになった。

女子青年団は、男子に遅れて結成され、大正の初めになって、多くは処女会の名前で出発した。処女会は当局の指導で組織され、女子青年の自発的要求からではなかったもので、活動は消極的であった。

2 和泊村青年団規則

第一条 本団は健全なる国民、善良なる公民たる素養を得しめ、団員をして忠孝の本義を体し、品性の向上を図り体力を増進し、實際生活に適切な知能を磨き、剛健勤勉克く国家の推進を扶持する精神と素質とを養ふを以つて目的とす。

第二条 本団を和泊村青年団と称す。

第三条 本団員を分ちて左の二種とす。

1 一部団員……年令満十二才以上、満二十才まで

2 二部団員……年令満二十才以上、満三十才まで

第四条 本団を左の四区に分ち、各区を更に各字に分つ。

一 和泊学区

1 和泊 2 手々知名 3 上手々知名 4 和

5 喜美留 6 畦布 7 出花

二 国頭学区

1 国頭 2 西原

三 大城学区

- 四 内城学区
- 1 皆川
 - 2 古里
 - 3 大城
 - 4 玉城
 - 5 根折

第五條 本団に左の役員を置く

- 一 団長
 - 1 村団長 一名、村長を推薦す。
 - 2 学区域団長 一名、学校長を推薦す。
 - 3 字団長 一名、学校教員又は特志者中より推薦し、任期を二カ年とす。

二 幹事

- 1 村幹事 二名、村役場書記より、村団長之を任命す。
- 2 学区域幹事若干名、学区域団長之を任命す。
- 3 字幹事若干名、会員の互選とし任期を二カ年とす。

第六條 役員の仕事は左の如し

- 一、各団長は団務を総理し団を代表す。
- 二、各幹事は団長の指揮を受け庶務会計の事務に従事す。

第七條 本団において施設経営する事業凡そ左の如し

- 一、修養上の施設
- 二、団の収益を図る事業
- 三、公益を図る事業
- 四、社会教化事業

第八條 本団に要する経費は団員の負担とす。

第九條 開会の時期及び度数を定むること左の如し但し臨時開会することあるべし。

- 一、村青年団、年一回、秋季之を行う。
- 二、学区域青年団、年一回以上、一回は秋季、余は学区域団長之を指定す。
- 三、字青年団、月一回以上之を行う。

第十條 優秀な字青年団及び善行ある団員は之を表彰する。

第十一條 団の目的に反し、団員たる体面を汚辱する行ある団員に対しては改悛を促し、尚改悛の情状なきものは之を除名す。

第十二條 本則の施設に關し必要なる細則は学区域青年団及び字青年団に於いて之を定む。

3 和泊村青年団の活動状況

「大正時代における和泊村青年団の活動状況」について

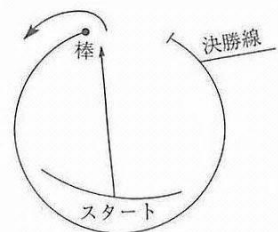
て、昭和五十八年十一月和泊町高齢者学級生七十四名を対象にしてアンケート調査を実施した。その結果は次とおりである。

① 各字における青年団（男子だけ）の活動

- 村内の全部の字に青年団があった。
- 各字の青年団では定例日を設定して、毎月団会を開催し、いろいろなことを協議していた。
- 村全体の運動会等に備えて、かけっこや相撲などの練習が盛んであった。
- 字主催の敬老会や、町主催の祝賀行事などに備えて、沖繩おどりの練習が盛んであった。おどりは女役も男子青年が女装をして演じていた。
- 字によっては早起き会をしたり夜警を回ったりする青年団もあり、また産業振興のため、ゐいたば仕事をしたり共同農園を経営する青年団などもあった。

② 和泊村青年總會（男子青年だけ）

- 毎年一回、和泊校校庭（現町役場庁庭）で、四小学区区対抗の運動会を実施した。
- 徒歩（かけっこ）



- ・トラックは円形
- ・出発は円の中のスタートから
- ・トラックの一周を百メートル、二周を二百メートルと言っていた。

③ 相撲競技も盛んであった。

和泊・知名両村青年運動会（男子青年だけ）

- 毎年一回実施した。
- 会場は両町の会場で、交互に実施した。
- 和泊会場 和泊校校庭 与和の浜 長浜
- 知名会場 和名校校庭 ヒョーシングドウ（上平川の前）のたんぼ） ジーチヨガニク（瀬利覚の東の浜）

④ 六部教育会主催青年運動会（男子青年だけ）

- 和泊・知名・与論の三村青年団が連合して、毎年

一回輪番で実施した。

○与論村の会場は与論小学校の校庭であった。

⑤ 各字における処女会の活動

○村内全部の字に処女会があった。

○各字の処女会は定例日を設定して、毎月会合を持ち、いろいろなことを話しあっていた。

○敬老会や町の祝賀行事などに備えて沖繩おどりの練習が盛んであった。おどりの練習は処女会だけで実施し、男役も処女会員がつとめていた。

○時々あつまつて、礼儀作法の指導を受けた。

○字によっては、ゐいたば仕事をしたり、共同耕作などをする処女会もあった。

(四) 婦人会

1 創設のころの婦人会活動について、「鹿児島県教育史」(鹿児島県教育委員会編)は次のように述べている。

① 婦人は、明治の中ごろまでは、組織されなかった。当時婦人は、家庭にはいればいわゆる主婦で忙しく、勉強はいらぬし、社会活動も必要ではな

いと考えられていたのである。

② 婦人は、戦争に刺激されて起こった。日清戦争で組織化がはじまり、一九〇三(明治三十六)年、政府の指導で、愛国婦人会(明治三十四年奥村五百子創立)の支部が全国の各府県に設立され、婦人は、戦争に際しては銃後を守り、平時は強兵を育てるといふ政府の軍国主義に協力することになった。

鹿児島県の婦人も、愛国婦人会の全国組織にはいり、日露戦争では、出征軍人の遺家族・傷病兵の慰問など、恤兵事業ジユウベイに従った。

③ 婦人はおとなしくて、すなおで、よく働くことがモットーである。明治・大正の婦人は、家族制度の縁の下の力持ちとして存在するのであって、近代婦人への自覚は期待されていなかった。

2 和泊村の婦人会について

① 婦人会の誕生

明治四十一年四月、和泊女子尋常高等小学校ができ、初めて純然たる女兒だけの学校として発足した。その初代校長は沖元綱先生であった。沖校長は平素から、立派な人間を育成するためには、学校教育・家庭教育・社会

教育の三者連携が大事であることを強く主張していた。

特に女子教育の場合、何よりもしつけが大事である。しつけの場としての家庭教育を重視しなければならぬ。

そのためには各家庭の母親と提携し協力することが大事であると痛感した。そこで毎月一回各集落に行き、母親との話しあいの場を持ち、それを継続実施した。このことが和泊町婦人会のさきがけになったと思われる。

② 各部落婦人会の組織と内容

○会員は全家庭の主婦とする。

○部落婦人会長には、各部落の徳望者が選出されて、その運営にあたった。

○例会には学校長・部落担当教師・女の先生等を招いて、講話を聞いたり、話しあいをしたり、実地指導を受けたりした。

③ 婦人会の活動

○各家庭における子供のしつけ

(婦人会での話しあいに基いて)

- ・早起き・早寝の習慣をつける。
- ・はだしのまま座敷にあがらないこと。
- ・机や食膳に向かうときは、必ず正座すること。

- ・食事の前には必ず手を洗うこと。
- ・うそをつかないこと。
- ・道端で小用をしないこと。

以上のことについて学校と家庭が緊密に連携しながら、習慣性を目指して努力した。

○社会の風俗・習慣の改善

衣服は従来の沖繩式の広袖を廃止し、ふだん着は筒袖、晴着はたもと袖と一定した。筒袖やたもと袖の裁ち方・仕立方は、婦人会で実地指導をした。

○髪型

沖永良部まげは、頭上に一塊の馬ふんをいただいたように格好が悪い。本土や大島本島で流行しているチングリに結い改めることとし、会合の場所で実地指導し、沖永良部まげを、即時解消するように、すべての婦人が努力した。

○交際の規約

冠婚葬祭は別として、日常の交際に豆腐や味噌コーバク(味噌をコーバクに詰めたもの)の持ち寄り、先方の迷惑になるので、相当額のお金を包むこと。(ただし持参金は四銭)

○持参金の包み方と記名の仕方の指導

紙と鉛筆を持参させ、個別に実地指導した。婦人の大多数が文盲であった時代のこと、「人手を借りずに自分で記名できた」と喜ぶ婦人が多かった。

○他家を訪問するときの作法

「けんそん」「つつしみ深さ」を婦徳の第一義と考えていた時代のこと、婦人が他家を訪問するとき、台所の土間からあがる風習があった。それを改めて、他家の台所から出入りするのには失礼になるので、ハタナエ（側中間）からあがるようにした。

○就寝前の火の用心

就寝前は必ず、かまどの火の始末を厳重にし、点検の上、水おけに水を一杯満たして、かまどの前に置くことにした。

○たい肥運び

畑に芋掘りに行くときは、必ず、ヒヤギに一杯たい肥を入れ、それを畑に運んで行って入れるようにした。

④ 校区婦人総会

たとえ衣装の奨励から一年程経って、婦人会の慰安と

して、和泊校で民謡大会が開かれた。実はたもと衣装の出初式を兼ねてのことだった。家庭で衣服を新調するときには、戸主や子供の衣服を優先させていた時代のこと、

家庭の主婦が、自分のために晴れ着一枚新調することは、大変むづかしいことであった。そのため、集った婦人中にも、筒袖が多く、たもと衣装は和泊・手々知名の一部の婦人に限られていた。さすがに広袖姿は一人も見当たらなかった。

⑤ 料理講習会

鹿児島島の出身で、和泊で下宿屋を経営していた山下商店の奥さんを講師として、お菓子や料理の講習会を開き、そのころ珍しかった金柑豆腐の作り方等を指導してもらった。

⑥ 機の織り方競技会

○当時本土や大島本島では、高はたで織物を織って能率をあげていたのに、沖永良部では、旧来の地ばたにかじりついて苦労していた。

○高はたを使用している和泊字の西つるさんと、地ばたの熟練者松本いせさんが、機織りの競争をし、大差をもって高はたの西つるさんが勝った。高はた

と地ばたの機能の差に驚いた会員は、次々高はたに切り替えていった。

⑦ 貯金奨励

家庭経済を確立するため「勤儉貯蓄」を奨励し、各字ごとに婦人会貯金を計画した。毎月一回集金して、低利で会員に貸し出し、相互に助けあいながら、貯蓄増強につとめた。婦人会貯金は、今も引き続き、活発に行われている。

⑧ 大正時代の婦人会

明治後期から大正にかけて、政府は軍国主義に傾き、富国強兵の立場から、青年団・処女会・婦人会の指導育成に力を入れた。和泊村内各字の婦人会は、毎月例会を持ち、学校の先生方などを講師として、時局認識や生活改善などについて、いろいろ指導を受けた。

○村内神社の大祭の折、境内で酒宴を開かないこと（このことは知名村にも呼びかけた）。

○役場が主体となって、カマドの改善に乗り出し、三ツ石カマドを土の塗り込みカマドに改善した。役場の農業技手今平市助氏が指導した。

○和泊・知名両村教育会は、大正十年八月六日から

五日間、沖縄の文学士伊波晋猷先生を招へいして、講習会を開催し、音声学・南国史談について指導を受けた。その折、伊波先生が、知名から徒歩で和泊に来られる途中、ヘーバルから和泊字の入口にさしかかったとき、物腰の柔らかな中年の婦人が「先生方どうぞ家で、足ユイシーメンシヨリ」と声をかけてあいさつした。（その婦人は山口禎善氏夫人幸さんであった）

伊波先生は、そのときの和泊の一婦人の真心こもったあいさつが、心にしみたと見えて、婦人会で講演されたとき、ご自分の気持ちを詠まれた歌を発表された。

「イラブンチュぬナサキ 百合ぬ花心 行きスル袖ニ香移チ」（伊集院カネ氏談）